

論文要旨

氏名 浅田 和泉

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

中国人日本語学習者による

多義的副詞の習得に関する研究

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク (1枚) を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

論文要旨

中国人日本語学習者による多義的副詞の習得に関する研究

浅田 和泉

本研究は、第二言語としての日本語を学ぶ中国人学習者が多義的副詞をどのように理解し、習得しているか明らかにしようとするものである。あわせて、日本語学習者が副詞の多義性を習得するための、より効果的な指導法について考察する。本研究における多義とは、「構造的多義」を意味しており、副詞が統語構造上の位置あるいは音韻構造により意味が異なることをさす。

これまで、日本語教育においては、外国人日本語学習者が副詞を使用する際、語の選択や語順、さらに韻律など、副詞の持つ多義性から様々な問題が生じると報告されている。副詞とその副詞の被修飾部分との位置関係は、副詞の意味解釈に影響を与える。そして、その修飾関係のあらわれ方には、音声と語順が関係すると考えられることから、副詞の意味を理解するには、韻律等の音声や副詞が出現する統語構造上の位置（語順）について、理解する必要がある。しかし、日本語教育の現場では、副詞の多義性に関する指導はほとんどおこなわれていない。副詞の多義性から生じる様々な問題を解消するためには、多義性について音韻的・統語的な観点からの指導が必要であると思われる。

そこで、本研究では、まず、副詞の多義性を明らかにすべく、中国人日本語学習者を対象に、中国人日本語学習者がどのように副詞の構造的多義を理解し、どの程度習得しているかについて考察した。

本論文は、以下の6章からなる。

第1章では、本研究の目的、および日本語副詞の多様性について述べた後、副詞の意味を分析する上で、副詞の修飾関係において音韻構造と統語構造がどのようにかかわっているかについての先行研究を示した。副詞の音韻構造と統語構造は副詞の意味を解釈する上で重要であるとされているが、副詞の音韻構造や統語構造上の位置（語順）についての研究は少ない。その中で、副詞に関するものとして、野田（1984）は、述語を被修飾語とする副詞について、格成分との関係からの副詞の語順、および副詞と語との統語的隣接関係から副詞の多義性について考察している。また、児玉（2008）は、副詞とその副詞に後続する語あるいは副詞に先行する語との統語的な隣接関係から、副詞の多義性について考察

し、副詞の修飾関係について、副詞が音韻句として句をなしているか否かという観点からその多義性について考察をおこなっている。

第2章では、日本語教育における副詞の問題点と外国人日本語学習者に対する副詞の指導法について、先行研究をもとに日本語教育で副詞がどのように扱われているかについて考察した。外国人日本語学習者の副詞の使用には、副詞の統語上の位置（語順）や呼応の問題、あるいは、会話における韻律など、副詞の統語構造や音声にかかわる問題が生じる。多義的副詞に対する指導からは、以下の1)~3)の特徴が見られた。

- 1) 副詞に意味の違いがあることは指導しているが、意味の多義性に対応できる指導はおこなわれていない。
- 2) 多義的副詞の意味・機能についての詳細な説明を必要としないとするなど、多義的副詞の指導に対して、消極的である。
- 3) 音声の必要性は認識しつつも、実際には指導はおこなわれていないようである。

このように、日本語教育では副詞の多義性については、ほとんど扱われていないことがわかった。また、副詞の音声を中心に上げた指導法も見られなかった。

第3章では、163名の中国人日本語学習者と48名の日本語母語話者を対象に、使用頻度の高い「よく」「ずっと」「ちょっと」「やっぱり」「もう」「まだ」について、「音声による意味弁別」調査を実施した。調査協力者に副詞が後続の語（被修飾語）と音韻句として統合している場合と単独で音韻句を構成している場合（独立音韻句）との対照を提示し、中国人日本語学習者がどのように音韻的特徴を知覚し、副詞の意味を弁別しているか、日本語母語話者の調査結果との比較の中で考察した。中国人日本語学習者に日本語母語話者の音声による副詞文を聞かせ、副詞の意味弁別状況について調べた。その結果、中国人日本語学習者の副詞の意味解釈に、音韻構造の違いから生じる音韻的特徴の違いは、ほとんど影響を与えないということが明らかとなった。これは副詞の意味が音韻句の構造によって異なるということに関する中国人日本語学習者の理解が低いことをあらわしている。特に、中国で日本語を学習している学生は、副詞が後続の語と音韻句統合している場合と独立音韻句の場合との音韻的特徴の違いを全く知覚できないことがわかった。また、「やっぱり」等、話し手の主観をあらわす副詞については、音韻構造だけで意味判断をするのは困難であることがわかった。さらに、中国で日本語を学習している中国人日本語学習者に比べ、

より長く日本語環境の中に置かれている日本で日本語を学習している中国人日本語学習者の方が、意味の弁別がなされていたことから、副詞の音韻的な特徴は、日本語環境の中で、ある程度自然習得されると推測できる。日本語母語話者については、音韻句の構造の違いによって、明確に副詞の意味を弁別していた。

第4章では、中国人日本語学習者がどのように副詞の意味解釈をおこなっているかを明らかにするため、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、語順の自由度について第3章と同様の副詞にて「語順生成調査」をおこない、中国人日本語学習者の副詞の語順の理解度について、日本語母語話者との比較の中で考察した。日本語の副詞は語順が自由であるとされているが、これまで語順の自由度についての研究はほとんど見られない。本研究において、調査をおこなった結果、日本語母語話者の語順は、語順制限のある副詞を除き、理論上の語順よりも自由度があるものと、自由度が確認されないものに分かれた。しかし、全体的にこれまでの先行研究より語順の自由度が高いことがわかった。これをもとに中国人日本語学習者の語順について考察した結果、主題の前に副詞をおくことができることの理解が低い等、語順の自由度をあまり理解していないことが明らかとなった。また、被修飾語を動詞とするか、動詞句とするかという副詞を置く位置に母語である中国語の影響が見られた。

また、第3章と第4章の結果を比較した結果、日本語母語話者には、副詞の音声と語順に相関関係が認められ、副詞の意味弁別に、副詞が被修飾語と音韻句として統合しているか否かが関係していることが明らかとなった。一方、中国人日本語学習者にも、ある程度は音声と語順との相関関係が認められるが、分析内容から、中国人日本語学習者の副詞の意味の弁別に、副詞が被修飾語と句を成しているか否かは影響を及ぼしていないと考えられる。第3章、第4章の結果から中国人日本語学習者が副詞の多義性を音韻的・統語的に理解しているとは言えない。また、中国人日本語学習者の第3章、第4章の結果を総合的に考えると、副詞の多義性は、必ずしも日本語環境の中で自然習得されるとは言えないと考える。

第5章では、第3章、第4章の結果が、中国人日本語学習者が副詞の統語的隣接関係、およびそれに関連する韻律などの音韻構造に関する知識を持たないことに起因すると考えられることから、実際に中国人日本語学習者を含む外国人日本語学習者を対象に、副詞の音韻句の構造とその意味との関連性を理解させ、それに伴う韻律を取り入れた音声指導を実施した。指導は、中国・韓国・台湾出身の日本語学習者を対象に、「よく」「ちょっと」

「もう」「まだ」について、週に1回(40分程度)、4回続けて音声指導をおこなった。音声資料には、1) 副詞の意味が確定している短文、2) 副詞が意味的にあいまいな短文、3) 1と2が混合している長文、を使用した。評価は、指導前後に録音した学習者の音声をもとに、1) 日本語母語話者による6段階評価、2) 聴覚印象によるポーズの位置確認、の2つの方法を用いて副詞別に結果を比較した。その結果、音韻句の構造とその意味との関連性を理解させることが多義的副詞の意味の弁別に指導の効果があることを実証した。また、効果的であるとされているプロソディーグラフを使用した音声指導とは異なり、学習者自身が多義的副詞の意味に応じた句の形成をおこない、発話を産出することが可能であることを実証した。今回、音声指導を実施する前にアンケートから、学習者が副詞の多義性に関する音声の知識を全く持っていないことが明らかとなった。

そして、最後に、第6章で本研究についてまとめた。中国人日本語学習者は副詞の多義性について、音韻的・統語的に習得できていないことがわかった。学習者に副詞の多義性を理解させるためには、語彙的意味の説明、あるいは韻律の指導だけではなく、副詞とその副詞の被修飾語とが句としてまとまっているかどうかについて、学習者に知識として指導することが重要である。また、副詞の多義性を習得させるために、副詞の音韻構造と統語構造を取り入れた音声指導は有効であると言える。